

## 中野市教育委員会指定文化財候補調査票

報告年月日 令和 2年 11月 24日  
調査者 高田 紫帆(水野美術館)  
報告者 本村 健

- 1 種別 有形文化財
- 2 名称 王日神社幕絵
- 3 員数 2
- 4 所在地及び所有者・権原者 所在地:長野県中野市諏訪町4-20  
権原者:王日神社
- 5 内容 別紙報告書
- 6 現状 破れあり
- 7 由来・伝来 児玉果亭作
- 8 保存方法 王日神社本殿の一室に巻いて保管
- 9 その他参考事項 なし

## 10 保護指定についての調査者の意見

王日神社に伝わる2枚の幕絵は、児玉果亭による真筆であった。第十七代宮司である、伝田丈親との関連も確認された。そして中野騒動直前の1869(明治2)年作であった。この幕絵は、児玉果亭史および中野の文化背景や歴史的に非常に貴重と考えられる。そして、なぜ1869(明治2)年に作られたのか、どのように使われていたか、なぜ和紙で幕絵を作ったのかなどの、分かっていないことや疑問点を解明することにより、果亭研究・中野(もしくは長野県)の文化歴史をさらに深く探る鍵となるであろう。この幕絵は、地元の歴史・くらし文化から生み出された素晴らしい宝であり、中野市指定有形文化財として指定する価値があると考えられる。今後その魅力を見直し、次の世代(未来)へとつなぐことが重要である。

(別紙報告書)

## 中野市教育委員会指定文化財候補調査報告書

はじめに

長野県・渋(山ノ内町)出身で、明治期に活躍した児玉果亭は、北信の文化芸術の発展に多大な影響を与えたとされる南画家である。中野市の王日神社に伝わる2枚の幕絵(縦2.4×横7.5m)は、これまで伝果亭作とされ、謎を秘めた社宝として現地で長らく保管されてきた。

この和紙を継いだ超巨大作品は、劣化が激しく、修復すべきものなのか、価値のあるものなのか、そして本当に果亭作なのか明らかではなかった。そこで、いつ、誰が、何のために制作したのかを解明するために、公益財団法人水野美術館の高田紫帆学芸員が調査を行い、その結果から高田学芸員が講演を行った2019(平成31)年3月24日に開催した中野市立博物館講演会「王日神社 伝児玉果亭作 幕絵から見えてくるもの」と、2020年(令和2)年2月23日に開催した中野市中央公民館文化教養講演会「絵解きで知る中野 伝児玉果亭作 王日神社・幕絵を囲んで」での資料を、中野市教育委員会がまとめ報告する。そしてその内容から、幕絵が中野市指定有形文化財として指定する価値があるのかを評価した。

児玉果亭について

作者として言い伝えられてきた児玉果亭(1841(天保12)年～1913(大正2)年)は、松代藩領沓野村渋湯組(現山ノ内町渋温泉)に生まれた。20歳頃より佐久間雲窓に入門し、南蘋派の画法を学んだ。1875年京都に出て田能村直入に師事し、南画を習得し、80年帰郷した。86年第2回内国絵画共進会に出品し好評を博した。以後郷里で制作を続ける傍ら、菊池契月、町田曲江、小坂芝田、山本凌亭、丸山晚霞など多くの門人を指導し、北信、ならびに信州の文化の礎を築いた。

幕絵について

幕絵の1枚は昔話の「舌切り雀」のおじいさんと着物姿のスズメが描かれている(図1)。もう1枚は大根をかじるネズミで(図2)、「大根食う」で大黒を表現している(信濃毎日新聞 2018)。この作品は、戦前から王日神社に保管していたものといわれ、区民でも知っているものは歴代氏子総代たちと限られており、いつごろからどうして王日神社に保管されるようになったか、知っている人たちもほとんどなかった(北信タイムス 1949)。この絵は「渋の児玉果亭に描いてもらったものだ」と言い伝えられているが、当時の関係者で生存者がいないため確かめようがない。また、この絵が何に使われたのかについては、古老たちの話によると「十二月三十一日の除夜にお宮(王日神社)で焚火をして、それを囲んで夜を明かした。この時、寒さ除けに使った」とされ、いずれにしても大正末から昭和の初め頃までで知らない人がほとんどだという(地元紙 1949)。



図1 幕絵「舌切り雀」



図2 幕絵「鼠大根」

方法

作者などの手がかりになる可能性があるため以下の4項目について調査した。児玉果亭に関する調査は、山ノ内町教育委員会の「果亭美術文庫」で実施した。

1. 落款(文字)の読解 2. 絵柄の読解 3. 物語の読解 4. 歴史の読解

「果亭美術文庫」は果亭が没した翌年の1914(大正3)年に、平隠村にて落成した。果亭最晩年の支援者である高橋作衛(月山)発案で果亭自身も参画し、募金により建設された。現在は、山ノ内町立東小学校が跡地となっている。

結果と考察

1. 落款の読解

2019年1月15日に、山ノ内町立志賀高原ロマン美術館にて「果亭美術文庫調書」を調査した。700件近くの調書が存在する。その中の「紙印」の調書で、落款と同じ「字士長」の画像を発見した(紙印①)。そして、2019年5月20日山ノ内町教育委員会にて「果亭美術文庫」所蔵の紙印を実見調査した。「紙印」は5つあることが判明した。そのうちの3点に、以下のように記載されていた。

紙印① 字士長(下)



紙印② 藤丈親印(上)



←対→

己巳夏四月中澣

紙印③ 士長寸齋



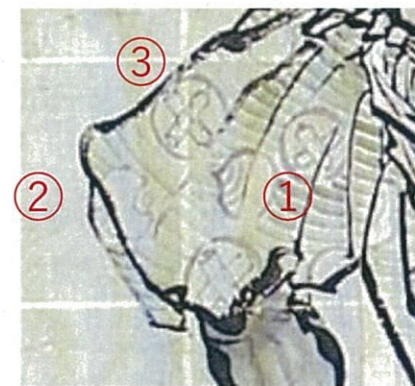
果堂彫刀




果堂とは果亭の号であり、果亭が彫った紙印であることが明らかになった。寸齋は、王日神社第十七代宮司伝田丈親の号であることが神社内の歌碑から確認された。そのことから、士長は果亭の字であると推測。そして制作時期は、明治2年4月中旬(己巳夏四月中澣)であることも確認された。

落款(紙印)の読解から、王日神社の2枚の幕絵は、(いつ)1869(明治2)年4月中旬に、(だれが)紙印は果亭作で士長は字の一つと推測されるため、幕絵は果亭の真筆であり、(何のため)王日神社第17代 伝田丈親が関与することが新たに発見された。

2. 絵柄の読解

「舌切り雀」



- ①  【宝珠紋】  
縁起の 良い物を寄せ集めた「宝尽くし紋」の一つ。
- ②  【分銅紋】  
正確さや財宝(金銀)を意味する。
- ③  【祇園守紋】  
祇園神社、現在の 八坂神社 が配布するお守りを象った紋。  
王日神社には八坂(弥栄)社が祀られている。

王日神社の幕絵「舌切り雀」には、「宝珠紋」と「分銅紋」の財や富を象徴する絵柄と、「祇園守紋」の王日神社を象徴する絵柄が描かれていることが明らかになった。

## 「鼠大根」

大根食うが大黒を文字った縁起物の絵柄であり、古くから描かれている題材である。大黒天は北(子:鼠)の方向の神であり、ネズミが神使とされた。大黒天とネズミを組み合わせた絵柄も多く確認されている。王日神社や東町の民家にも大小の大黒天像があり、東町の大黒天信仰に関係する可能性もある。

### 3. 物語の読解

#### 「舌切り雀」

幕絵の図柄は、錦絵や当時流行した赤本などから発祥した「舌切り雀」の図柄と類似していた。またこの絵柄の場面は、小さいつづらを貰った直後の場面であり、金銀財宝は「富」を表し、正直爺の欲ない選択は「徳」を表すと推測される。

### 4. 歴史の読解

1869(明治2)年頃まで 果亭・丈親の接点としては、漢詩創作結社「晚晴吟社」(1795～1840)よりやや遅れ、西原亦庵の周囲に、岡本浩庵(蘭学医)、高野鄭庵(書家)、児玉果亭、町田謙斎(商人/書家)、伝田寸斎(丈親)等が集まった。詩歌創作活動の中で交流を深めた可能性がある。

児玉果亭は、この年数えで29歳であり、迂果生、果堂、果堂山人、果亭散の号を用いた。この時期は果亭史としては空白の時期であり、秋以降は、前橋の龍海院に移った師・畔上樸仙(45歳)を追って、上州入りした。この幕絵は果亭史にとって謎多き時期の作品と考えられる。

伝田丈親は、この年数えで37歳(果亭より8歳年上)であり、2月に寒沢大幟(2×14m、2枚)に揮毫している。前年、20歳頃から開塾していた私塾を廃業した。筆子は男子85人、女子20人を数え、中野町の寺子屋では一番の人数であった。この幕絵は丈親が亡くなる4年前の作であり、中野騒動直前に描かれながら焼失しなかった貴重な時期の作品である。

## 評価

王日神社に伝わる2枚の幕絵は、児玉果亭による真筆であった。第十七代宮司である、伝田丈親との関連も確認された。そして中野騒動直前の1869(明治2)年作であった。この幕絵は、児玉果亭史および中野の文化背景や歴史的に非常に貴重と考えられる。そして、なぜ1869(明治2)年に作られたのか、どのように使われていたか、なぜ和紙で幕絵を作ったのかなどの、分かっていないことや疑問点を解明することにより、果亭研究・中野(もしくは長野県)の文化歴史をさらに深く探る鍵となるであろう。この幕絵は、地元の歴史・くらし文化から生み出された素晴らしい宝であり、中野市指定有形文化財として指定する価値があると考えられる。今後その魅力を見直し、次の世代(未来)へとつなぐことが重要である。